学校の国際化を進めるために

広島県立祇園北高等学校　教諭　　江　草　章　仁

(1)　はじめに

「国際化の時代」といわれてすでに久しい。従って今更「本校では国際化を進めていきます」などといったりすれば、遅れていると嗤われてしまいそうだ。しかしながら本校の実体は残念ながら非常に遅れていると言わざるを得ない。これから本校、あるいは日本の高等学校が取り組まなければならない「学校の国際化」は、どのようにして始めていくべきなのであろうか。

このプロジェクトの第一の目的は、学校の国際化を進めるためにできること、注意しなければならないことなどを検討することである。そして所属校において国際交流を進める第一歩としていきたいと考えている。

またこの報告書では、アメリカの学校で参考になること、印象に残ったことを紹介しておく。

(2)　研究の概要

第一の目的である国際交流に関してであるが、所属校（広島県立祇園北高等学校）と、現地の高校（J. H. Rose High SchoolとD. H. Conley High School）との交流を中心に考えている。

一般に「学校の国際化」というと、次にあげるような内容が考えられる。

①生徒・教員の交流を通して

最も直接的で、影響力があるのが、実際に人間が移動する（海外に行ったり、来たりする）という国際化の進展の方法である。しかし、みんなが実際に行けるわけではないので、全体がその恩恵を受けるのには配慮すべき点、考慮すべき問題点もある。

②インターネットなど情報機器を通して

情報化の進展と相まって、国際化と情報化がイコールとして語られる場面が多くなってきている。情報リテラシーを高め、外国の人とも同等にコミュニケーションを図れる人間の育成がこれからの日本の教育に不可欠であることは議論を待たないであろう。しかし「これまでインターネットなしでやってきたから、これからもなしですむ」という誤解をしているとしか思えない発想や、「必要なのはわかるが金がない」などという言い逃れがまかり通っているのも事実である。

③教育課程・学校行事を通して

本来の学校教育の根幹である教育課程や学校行事の内容が、国際化のニーズに合致していることが最も望ましいが、授業の場合は時間数の確保やシラバスの作成、学校行事の場合は他の行事との整合性などの問題がある。

本研修では以上の３つの分野について「学校の国際化」の可能性について考え、本校の特色を出した「学校の国際化」とはどのようなものであるのが望ましいか、どのようにして国際化を進めていけばよいのかを考えた。

(3)　研究の内容

前述の３つの項目について、今回の研修でアメリカの教員と話し合った内容から、具体的に述べてみたい。

①　生徒・教員の交流を通して

ア　生徒の交流

本校では、毎年多くの生徒が、春休み、夏休みなどを利用して、海外でのホームステイに参加している。

毎年どのくらいの生徒が参加していたかははっきりしていないが、10名前後であったのではないかと想像される。「想像される」と書いたのは、学校側が、全体を全く把握していなかったからである。これにはいろいろな理由が考えられるが、そのような活動があまり重視されなかったのは事実である。

遅まきながら2000年の夏を第１回として本校主催の海外ホームステイ研修がスタートする。(第１回目はアメリカ合衆国ワシントン州)。近い将来ノースカロライナの学校との姉妹校提携も含めて、相互に生徒を派遣する形での交流を考えていきたい。

このような海外研修の一番大きな問題点は、全ての生徒が参加することができないという点である。学校行事の中で、参加した生徒を「教師」として彼らから何かを学ぶという姿勢で、経験を広く共有するということが考えられなくてはいけない。

具体的には、文化祭などの場面での発表・展示であったり、研修報告書のような冊子の作成が考えられる。

しかしこれに対して海外からの生徒の受け入れは、直接海外での研修するほどのインパクトはないが異文化と直に接するという点では同様の効果があるし、プログラムに参加できなくても日常の学校生活の中で異文化体験ができるという点では「海外に行く」と言うよりはむしろ効果的である。

本校にはおそらく留学生を受け入れた経験はないのではないかと思われるが、できれば短期のホームステイだけではなく、1年間にわたる留学生の受け入れを考えていきたい。

多くの学校では、ＡＦＳ（American Field Service）などの団体を仲介として海外からの留学生を受け入れているケースは多いが、トラブルが起こったとき、あるいは起きそうになったとき、相談できる相手はこれらの団体の日本の支部の方であるケースがほとんどである。その生徒の母国での普段の様子はほとんど分からないままである。しかし直接その生徒の保護者や、出身校の担任などと話ができると、そのトラブルを最小限にくい止めたり、未然に防ぐこともできる。

そういうことを考えたときに、お互いに面識のある教員同士が向こう側とこちら側で生徒の留学の世話をするということが大きなメリットがある。

このような生徒の交流というのは多くの学校でも行われていることだと思うが、その次の段階として考えられるのは、スポーツを通した交流である。

たとえば日本高等学校野球連盟の場合、単独チーム(それぞれの学校の野球部)が海外に遠征して試合をすることは原則として認められていない。海外遠征ができるのはいわゆる選抜チームである。しかしこの規定には例外があり、姉妹校の提携がなされている場合は単独チームであっても海外に遠征することが可能である。この先いろいろなクラブが海外遠征をして、スポーツを通して交流を深めるということも可能である。

この点今回の研修においても、多くの先生方と可能性について話し合ったが、いろいろな障害（たとえばアメリカの場合シーズン制が確立しているので、いつでもそのクラブが活動しているとは限らない。夏休みに野球部が遠征してもシーズンオフになっている。)があるが、いずれも非常に前向きに検討していただいた。

ただし、野球でいえば20人近くの部員を派遣するということになると、保護者の負担などを考えると難しい面もでてくる。しかし、希望者を中心に選考し、数名をこの交流に参加させ、現地の学校に短期で受け入れてもらって、その学校の生徒として試合や練習に参加するということであれば実現の可能性は高くなる。このようなケースを打診してみたところアメリカ側の対応はやはり柔軟であった。

逆にアメリカから生徒を送ってくるということになった場合には、こちらの対応次第でどのようなことも可能となると思われる。

イ　教員の交流

このプロジェクト自体が教員の交流を促進するためのものであるが、2週間でできることは限られている。長期的、定期的に教員の交流を実現させることが意味のあることだと考えられるのだが、Rose High Schoolで「1年間それぞれの教員を交換して、お互いに相手の学校で授業をするということが可能か?」と質問をしてみたところ、いろいろ検討をする必要はあるが、十分現実味のある話だということであった。

しかしながら1年間ということになると、日本側の対応が非常に難しいといわざるを得ない。行政の仕組みの違いといってしまえばそれまでだが、アメリカ側の対応は非常に柔軟で前向きであるので、あとは我々がやりたいと思った分だけ、実現させることは可能であろう。

この点に関していえば可能性があるのは、まず、短期のものが考えられる。アメリカの夏休みに入って、最初の1ヶ月半（6月上旬から7月中旬）は日本の学校ではまだ授業をしている。その間であればアメリカの教員を受け入れて、授業に参加してもらうことは可能である。逆に8月の中旬から下旬にかけてはアメリカの学校は新学期がスタートしているので、向こうの学校で授業をすることも可能となる。

また、長期のものであっても、現在のAETを受け入れているJETプログラムを利用することが可能なのではないだろうか。アメリカの教員に比べてAETの給料はずいぶん高いので、こちらの学校が向こうの教員の受け入れ先になることがはっきりしていれば休職してAETの身分で日本に来るということを考えた場合、参加の希望者は多数いると思われるし、日本側としても現在のJETプログラムのあり方よりもいろいろな面でメリットは大きい。

② インターネットを通して

インターネットを通しての交流は簡単に実現させることができる。実際に帰国後3年生の英語の授業でJ. H. Rose High Schoolとの間でメールの交換が始まった。

アメリカの学校ではGore副大統領の「情報ハイウェイ」構想以来急速にインターネットが普及し、ほとんどの学校ですべての教室からインターネットにアクセスできるし、情報リテラシーについて大きな関心を払っている。

ノースカロライナでは、卒業の要件としてコンピュータを扱えることという項目が付け加えられた。8年生の時にコンピュータについて学科と実技のテストを受けて合格しなければならない。これは1996年に8年生となった学年より適用されている。(資料参考)

この情報教育に関しては日本がひどく遅れているのは周知のことであるが、遅れている上に対応が遅いのが気にかかる。ノースカロライナでは、computer skillをreading, mathematics, writingと並べて基礎的な学力と考えているのと比べると、大きな差がある。次のページの写真は今回訪問した2校の例であるが、どの学校でもコンピュータの使える部屋が10以上はある。デジタル・ディバイドという言葉が日本語の中でも定着しつつあるが、まさに国際社会の中で、日本はおいていかれているということを実感する。

今回の訪問で訪れた2校とも各教室からインターネットに接続できるのだが、ちょうど訪問の前半はいずれの学校もシステムがダウンしていた。どちらも不用意なダウンロードや、添付メールからウィルスにやられていたのが原因だった。

数日後にシステムは回復したのだけれど、Rose High Schoolでは生徒はインターネット禁止、Conley High Schoolではダウンロード禁止という措置がとられた。

現時点で日本ではいかにインターネットを普及させるかということが話題になっているが、各学校に普及していったときに、この2校で起こったことと同じトラブルが起こる可能性は非常に高い。そのとき日本の学校にはこういうトラブルを未然に防げる、あるいは、システムの回復や、その後の処置ができるシステム管理者としての教員がいるかというと、はなはだ怪しい。こういうトラブルを対岸の火事として眺めていられないのも、情報化時代の特徴である。他山の石としておきたい。

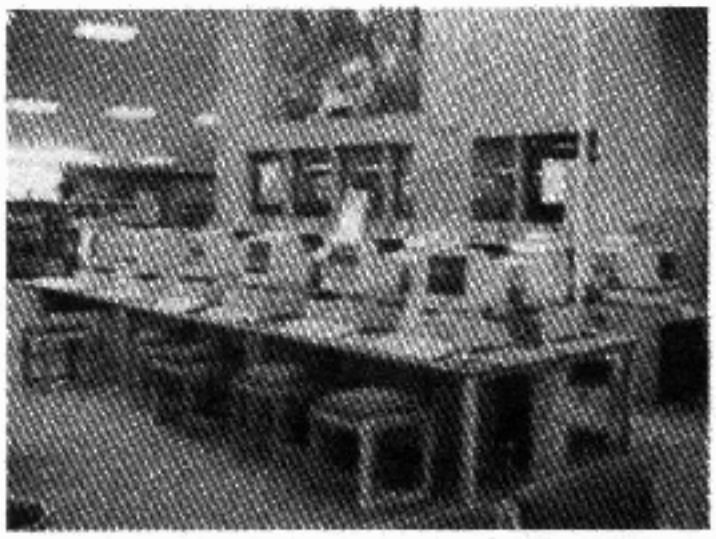
③ 教育課程・学校行事を通して

このほか可能性があるのは、たとえば理科の授業などにおける共同研究のようなものであるとか、文化祭などの時にお互いの学校にそれぞれの学校紹介の展示をする、ということが考えられる。アメリカの学校は各クラスで多くのプロジェクトワークを行う。例えば外国語の授業のなかで、その言葉が話されている国の文化について調べたり、ビジュアルに訴えるものを作成したり、食事を作って実際に食べてみたりする事が多くある。Rose High ShoolとConley Hig Schoolの日本語のクラスでは、生徒が日本の生徒に送るためのCDを作成しているという。もちろんその他の授業でもそのような事が多く行われる。このような具体的な「もの」などの形で、こちらの学校の文化祭に何か展示を依頼するということは可能であろう。

次に今回の訪問で参考になったこと、印象に残ったことをいくつか上げる。

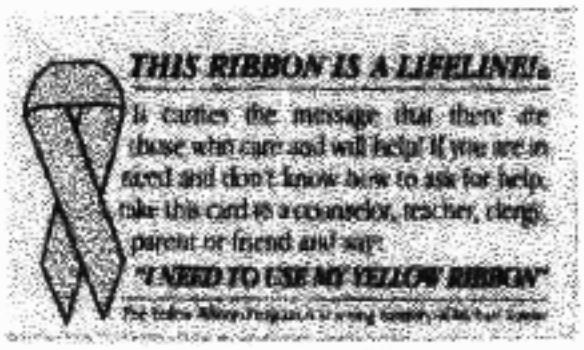
① The Yellow Ribbon Programについて

このプログラムは、高校生の自殺を防止しようという目的でスタートした。プロジェクトの提唱者は Dr.



Rose High School Media Center

Martin Middle SchoolのKeyboading Class



ラミネートされた携帯カード

Karen Alldredge という人で、息子の Jake Kolodziejczakが自殺したことから、二度とそのような悲劇を繰り返さないように、という思いで始めた運動である。自殺はアメリカで一番数が増えている死因であるということ、アメリカのティーンエイジャーの死因の中では、2番目に多いことなどとを訴えている。

具体的には9歳から18歳の子供たちに Yellow Ribbon Cardを配布し、自殺などの危険を持ちながら、周りに対して助けを求められないという状況から救うというのである。自殺を考えたり、苦しくなってきたときに、このカードを周りの誰か（大人や、友達）などに差し出すだけで、真剣に悩みを聞いてあげられるようにする、というのがこのプログラムの骨子である。

その他、自殺を考えている子供たちに、いろいろなアドバイスを与えたり、周りで自殺を考えている子供をみたら、どのように対処するべきかというアドバイスや、自殺の前兆を発見するポイントなどの説明をしている。

Yellow Ribbon Program
のパンフレット。
学校でも配っている。

日本でもようやくスクールカウンセラーの設置などがあちこちで始まっているが、アメリカでは何年も前からすべての学校に設置されており、重要な仕事を任されている。日本の社会も近年特に青少年の精神面の問題が叫ばれているが、学校のなかでもこの点を真剣に考えて、生徒指導が取り締まりになるだけでなく、カウンセリングによって問題行動や、反社会的あるいは非社会的な行動に対して適切な取り組みをしていかなければならない。と同時にこの The Yellow Ribbon Programのように校外の活動と協力することも大切である。

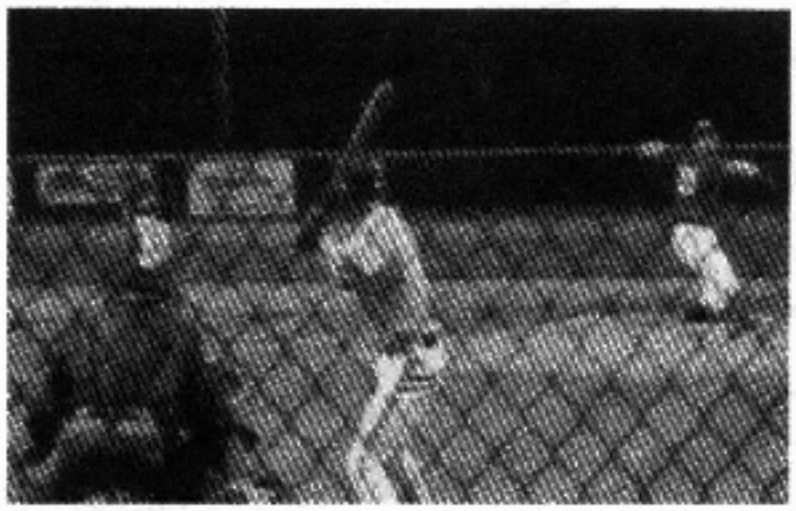
② 精神的ケアという点で感心した事柄が一つある。今回のプロジェクトの本来の目的とは違うが、Wake Medical Hospitalでのことである。ここでは患者や家族のために毎日昼にカフェテリアでピアノなどの生演奏のコンサートが開かれている。例えば骨折したときのギプスなども、白だけでなく、黄色、水色、ピンク、紫など色とりどりである。患者は患者らしく、というのとはひと味違って、患者が精神的に落ち込まないように精神的なバックアップをしている。

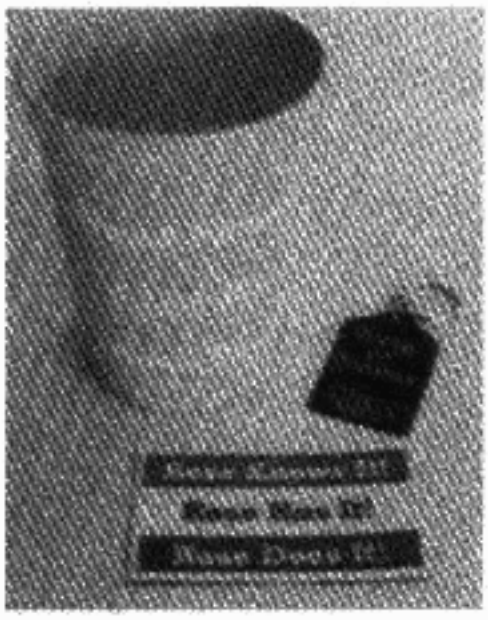
このことは一つの現象面であるが、どんな場面でも人間性豊かに「心」の面を常に意識のなかにおくという、アメリカ社会の意識が現れているような気がする。

③ 今回高校の野球部のゲームと、女子サッカー部のゲームを観戦する機会があった。9月になればフットボールのゲームがある。いずれもナイトゲームで保護者や他の生徒が観戦、応援しやすい仕組みになっている。（フットボールは金曜日が高校、土曜日が大学、日曜日がプロという大まかな決まりがある。）次の④とも関係するが、開かれた学校ということに関しては、いろいろと見習うべき点も多い。

④ 今回訪問した6校でそれぞれいろいろな「お土産」を頂いた。マグカップや、プラスチックのカップ、ステッカー、キーホルダー、鉛筆、マグネットなどいろいろであるがいずれも学校名や、学校のキャッチフレーズが入っている。あるいは学校要覧であるとか、そのほかの資料なども大変充実している。

日本の学校ではそこまで「スクールグッズ」をそろえている学校は少ないのではないだろうか。例えばこ


Rose High School vs Conley High School



Rose High School グッズ

れはインターネット上のホームページにも同じ事がいえる。アメリカの学校はほとんどがホームページを持ち積極的に学校の内部の情報を公開している。最近では学校のアカウンタビリティー（accountability：説明責任）ということがいわれるが、学校の内部の情報をどんどん公開し、宣伝活動をすることも必要な事柄であろう。

⑤　各学校ではちょうど年度末を控えて次年度('00-'01）の選択科目の登録が始まっていた。選択科目がたくさんあるところももちろん参考になるが、次年度にほかの学校に進級する場合、進級した後で科目選択をするのではなく、前の学校にいるうちに選択科目を決定する。

日本では現在中高一貫教育などに注目が集まっているが、アメリカの学校では中高一貫などという概念はなく、K－12という発想で学校が組織されているので、学校は変わっても規則や教育方針などがカウンティや州の中で共通のものが多いので、こうしたことが可能になる。

従って高校以外では卒業式もなく、入学式もない。日本が小中高と三つに区切られているのに対してアメリカにはそのような大きな区切りはなく、強いて言えば夏休みで12に区切られていると言ってよい。アメリカの教員と話をすると日本のシステム（アメリカの学校は学校があるときと、夏休みの２期に分かれるのに対して、日本では１年間ずっと学校があるという）は教育の継続性という点では優れているという人が多い。（「夏休みが終わって帰ってくると、生徒は前年度学習したことを全部忘れる」という。）しかし12年間の一貫性となるとアメリカのシステムに分がありそうだ。

(3)　研究の結果と考察

今回の訪問の目的はアメリカの教員と今後の交流の打ち合わせをすることであり、その成果は十分上がった。いい意味でも悪い意味でも日本の先を行くアメリカであるからいろいろと参考になることは多い。二つの文化を比較したときにどちらかが絶対的によいとか、絶対的に悪いということはいえない。アメリカの学校はアメリカという国の文化背景のなかでできあがってきた。また日本の学校は日本の文化のなかでできあがってきた。その環境のなかでそれぞれ理由があって今の姿があるので、単純に両者を比べてどうのこうのとはいえない。しかしＥＣＵのSchool of Educationの学部長との懇談会で、学部長がいっていたように、このような交流をするときのメリットは、他と比較することによって自分をよりよく知るということもある。

まずお互いを知るという意味では有意義な訪問であった。何よりも大切なことはこのような経験を持たない他の教員、生徒とこの経験を分かち合うことによって、より意義のあるものにしていかなくてはならない。

(4)　今後の展望

このプロジェクトは３年間の時間制限のあるプロジェクトであるが、交流自体は無期限である。少しずつ日常の教育活動に定着していくようにしなくてはならない。

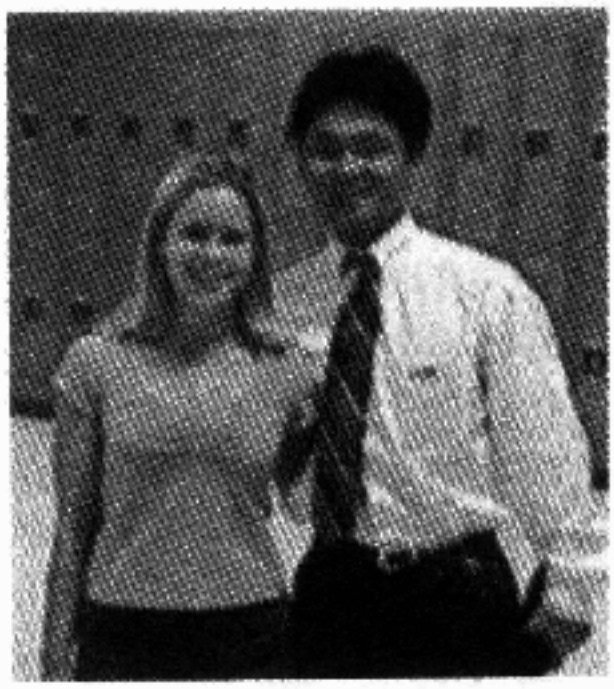
例えば生徒が日常的にインターネットが利用できる環境になったとき、（今すでににそうなっていなければ、すでに世界の趨勢から大きく遅れているのだが）英語の学習でアメリカの友人をうまく利用することができる。英作文などで英語の文章を書いたとき、教員が一人ですべてをチェックすることは不可能であるが、それぞれがE-mailでアメリカの友達に添削を頼むということが可能である。

このように工夫次第でいろいろな活動が考えられる。

(5)　おわりに

この旅行は私にとって里帰りのような旅行であった。Rose High School は'91～'93まで日本語を教えた学校であり、定期異動などがないので今も多くの同僚がいる。私たちの結婚式でBrides madeをつとめてくれた当時小学校の３年生だった Blair Weaver とも再会した。現在Rose High Schoolの２年生になっていた。

また当時小学校で日本の文化を教えた生徒が、D. H. Conelyの日本語のクラスにいた。彼らとも８年ぶりの再会であった。



Rose High SchoolのBlairと

ある国のことを好意的に受け入れられる一番の方法はその国に個人的な友人、知人をたくさん持つことである。いくらその国のことをよく知っていても、友達がいるといないではその国の身近さが全く違う。逆に日本のことをよく理解してもらい、好きになってもらうためには、その国の人にとってよき友人になることから始めるのが何よりも大切である。

自分たちや生徒をアメリカとの橋渡し役にすることがこのプロジェクトの本当の目的ということができる。

＜資料＞　ピットカウンティの教育方針がうかがえる科目選択ガイドの一部

North Carolina Testing Program

The ABC's of Public Education, a plan to recognize public education in North Carolina, is based on the belief that all children can learn and that the mission of the public school community is to challenge, with high expectations, each child to learn, to achieve and fulfill his or her potential. To encourage a strong emphasis on the basic academics, the ABC's focuses the statewide testing program to target the basic academic skills (i. e., reading, mathematics, and writing) which should be mastered by all the students.

NC Tests of Computer Skills

The North Carolina Tests of Computer Skills assess the K-8 components of the computer skills curriculum. The assessment consists of a multiple-choice test and a performance test. The tests are administered initially to all students at grade 8. The testing dates are locally established. Each student may participate in a maximum of one test administration date in the fall, one in the spring, and one in the summer.

Computer Proficiency Requirements

Students who entered the eight grade during or after the 1996-97 school year (class of 2001) must demonstrate computer skills proficiency as a requirement for graduation. Students tested during grade 8 who do not meet the proficiency standards are to be retested during subsequent years on the test.

NC Competency Test

Competency Requirements

NC High School Comrehensive Test

NC End-of-Course Tests

A Registration Guide for Pitt County High School Students (1999-2000)

日米高校生の学校・学習に対する意識の比較

広島県立広島井口高等学校　教諭　　山　下　　雅

(1)　はじめに

資源に乏しい我が国の経済的発展は教育力によるところが大きいとされ、諸外国から一定の評価を受けてきた。これは画一的で集約的な学校教育が機能し効果を上げていたためと考えられる。しかし一方で、日本の学校教育は「知識偏重」で「受動的」であるとの反省もあり、改訂された新学習指導要領では「生きる力」「問題解決能力」の育成がうたわれている。これには、高度に情報化が進む中で、各個人が自ら学び、問題を解決する態度を養成することが重要視されているという背景がある。

これに対しアメリカの学校教育は、以前から「能動的」で「自己表現」が重視されているとされる。これまでの数少ない米国の教育関係者との交流の経験からも、米国の教育において児童生徒は、日本に比べ能動的で積極的であることが求められているようであるし、実際の生徒の様子もそうであるように感じてきた。

こうした点に鑑み、今回の研修で日米両国の学校のあり方や教師・生徒双方の意識を知り、アメリカの児童生徒（特に高校生）の生活ぶりを実際に目にすることで、特に生徒の「学校や学習に対する意識の違い」を探り、今後の新しい教育に取り組む参考にしたいと考えた。

(2)　研究の概要

上記のテーマに沿って、具体的には次のような方法をとって研究を行った。

1．日本の高校生が考えている「日米の高校生活の違い」を探る
2．日米の高校生に、学校生活や勉強に関する同じ内容のアンケートを実施し結果を比較する（回答は自由筆記を中心とする）
3．アメリカの高校生に、日本の高校生が考える日米の高校生活の違いをまとめた資料を見てもらい、感想を書いてもらう
4．授業参観や学校での様子を見せてもらうことにより、高校生の生活ぶりを比べる

両国の高校生を対象とするアンケート調査はすでに様々な形で大がかりに実施されているが、これまでどの調査を見ても何となく釈然としない思いがあった。それは日々多様な考えを持つ生徒と接している者として、「日本の高校生」や「アメリカの高校生」をひとまとめに扱うことに胡散臭さを感じること、外国の生のデータを日本の制度や価値観に基づいて解釈することの危険性を無意識のうちに感じているからではないかと思う。

そこで本研究では、サンプル数は少なくても調査を結果に実感が伴ったものにしたいと考えて、調査対象（答えてくれる生徒たち）を自分の目で確認できる数と範囲に絞り、また回答は自由筆記とすることによって、その背景や心情を考察できることに留意した。

(3)　研究の具体的内容および方法

①　準備段階

高校生の実態に沿った内容とするため、我が校の1年生2クラス計79名に「高校生活に関してアメリカの生徒に聞いてみたいこと」と「アメリカの高校と比べて日本の高校のほうがよいと思うところ、悪いと思うところ」を自由に書いてもらった。生徒たちは楽しみながら様々なことを書いてくれた。その内容を整理して次のような、アンケート（資料A)、と資料Bができた。

資料A

●A Questionnaire about Your School Life　高校生活に関するアンケート

Q 1　age（年齢）:[　　]　　sex（性別）:[　　]

Q 2　What do you think is the most important thing in your high-school life?
（高校生活で一番大切な物は何ですか。）

Q 3　What do you ask your teachers for most?（学校の先生に求めることは何ですか。）

Q 4　What is the most important thing to do during class?（授業中最も心がけていることは何ですか。）

Q 5　What does your teacher tell you to do most often during class?
（学校の先生が授業中によく指示することは何ですか。）

Q 6　What do your parents say most often about school life or study?
（母親または父親が勉強や学校生活に関してよく言うことは何ですか。）

Q 7　When you have some trouble about school who do you consult with?
（学校のことで悩んだとき相談する相手はだれですか?）

Q 8　Among school events or things you have to do at school, what do you like best?
（学校行事や学校でしなければならないことで最も好きなことはなんですか。）

Q 9　Among school events or things you have to do at school, what do you hate the most?
（学校行事や学校でしなければならないことで最も嫌いなことはなんですか。）

Q10　What do you usually do after school?（放課後には何をしますか。）

Q11　What do you usually do on weekends ?（週末には何をしますか。）

Q12　How long do you usually study at home in a day?（家でどのくらい勉強しますか。）

Q13　Do you ever come to school on weekends or in holiday?（休日に学校に来ますか。）

・Yes. What for?（はい。何をしに。）　・No.（いいえ。）

Q14　Are you having fun at school?（学校は楽しいですか。）

Q15　What do you think you will be doing ten years later?（10年後に何をしていると思いますか。）

資料B

●アメリカの高校についてのイメージ

(What Japanese Students think of American high school)

Ⅰ．高校生活一般について（General High School Life）

・日本の高校にはたくさんの決まりがあるが、アメリカでは制限が少なく自由である
(In high schools in Japan, there are many rules, but in America there are few rules or regulations. So American students seem very free.)

・制服がない（They have no school uniforms.）

・日本では親や先生が細かいことを言うが、アメリカではそうではない
(In Japan both parents and teachers are very fussy about everything, but in America they are not.)

・日本より大学に入りやすい（It's easier to go into university than in Japan.）

・車の免許がとれるし、車で通学できる（They can get driver's license and go to school by car.）

・個人用の大きなロッカーがある（They have a big locker for personal use.）

・学校行事が大がかりである（They have large-scale school events.）

・生徒が使えるコンピュータがたくさんある（There are a lot of computers for students to use.）

・銃やナイフを持っている人がいて危険
(Dangerous because some students have guns or knives with them.)

・クラブ活動が少ない（There are only a few club activities.）

Ⅱ．授業・勉強に関して（Class or Study）

・日本では静かに授業を聞くことを求められるが、アメリカではみんなが自分の意見や考えを言うことを求められる（In Japan, students are asked just to listen to the teacher but American students have to express their opinions or thoughts.）

・授業に活気があってにぎやかで楽しそう（Students are all active and classes are very lively.）

・日本の学校に比べて試験が少なく勉強が楽そう

（There seem to be fewer examinations or tests so it seems easier to study.）

・宿題が少なく家であまり勉強しなくてもよい

（There are few assignments and students don't have to study a lot at home.）

●日本の高校のよいところ（What's good in Japanese high school.）

Ⅰ．高校生活一般について（General High School Life）

・修学旅行がある（We have school trips.）

・体育祭や文化祭など学校行事が多い

（We have a lot of school events ; athletic meets, school festivals and long-distance races, etc.）

・ホームルームクラスがある（We have a "home-room class."）

・クラブ活動に熱中できる（We can be absorbed in club activities at school.）

・制服があるから着る物に悩まない

（We have school uniforms so we don't have to worry about what to wear.）

・自分たちで学校の掃除をする（We clean our school by ourselves everyday.）

Ⅱ．授業・勉強について

・テストや宿題が多いのでよく勉強する。(We have a lot of tests and assignments and we study a lot.)

・皆が静かに勉強するので集中しやすい（Everybody is quiet during class so it's easy to concentrate.）

・意見を述べることなく、黙って聞いていればいいので楽

（We have only to listen to the teachers without expressing ourselves. It's very easy.）

・アメリカより進級が楽。(It's easier to move on to the next grade.)

2つのクラスの生徒たちの合作によりできあがった資料Aのアンケートを、そのうちの1クラスに実施した。アンケートに答えてくれたのは1年生39名（男子20名、女子19名）である。サンプル数は少ないが、私にとっては一人ひとりをよく知っている、結果が実感できる生徒たちである。

② アメリカでの調査

アメリカでは Craven County の New Bern High Schoolの生徒に調査対象になってもらい、資料Aのアンケートに答えてもらうとともに、資料Bを読んだ感想を書いてもらった。協力してくれたのはこの学校の2つのクラスの生徒計41人（男子22人、女子19人）である。この高校は近辺のほかの高校と同様、授業は基本的に選択制のため1つのクラスに様々な学年の生徒がおり、17歳が23人、16歳14人、15歳3人、28歳（?）がひとりという構成であった。対象生徒の選択にはこの学校の教員が日本での調査対象の構成に近くなるよういろいろ気を遣ってくれ、学校の平均的生徒構成よりやや学習意識の高い生徒が多くなっているそうである。

アンケートに答えてくれた生徒たちがどんな環境の中で毎日の高校生活を送っているかについての理解がないとアンケートの結果を読みとることはできない。そこで調査結果の前に、この学校の様子と滞在して感じたこと、気づいたことをいくつか述べておく。なお、これから述べる学校内の様子はこの学校に特有のものではなく、North Carolina州の学校においては多少の差はあれ基本的には同じであると考えてよい。

③ New Bern High Schoolと生徒の実態

New Bernは NorthCarolina州東部の歴史ある落ち着いた町である。New Bern High Schoolはこの町にひとつしかない公立高校で、9年生から12年生まで約1700人の生徒が学んでいる。North Carolina州ではどこでも基本的に、公立高校は「地域にひとつしかない」そうで、近隣の子供はみなその学校に通う。その結果、ひとつの高校の中で家庭状況や、学力、教育に対する本人および保護者の意識など、いずれについても差がとても大きいそうである。もちろん障害を持った生徒も同じ学校で学ぶ。生徒の約40%が大学進学、約20%

がコミュニティーカレッジに進学、残りが就職という進路状況だという。「この多様性が私たちの問題点でもあり、私たちの誇りでもある」とは世話をしてくれた教員の弁である。周辺の学校の教員のこの学校に対する評価は「とてもいい学校」であるようで、何人かがそう口にするのを耳にした。

このNew Bern High Schoolに火曜日から金曜日までの4日間通い、いろいろな授業を参観させてもらった。教師・生徒とも日本に対する関心は高く、「参観」のつもりで教室に入るといきなり授業がストップして自己紹介を求められ、「さあ日本のことを話してください」と頼まれることが多かった。その後はおきまりの質疑応答。面食らったが日本での場合と同じように生徒を教卓から眺めることで、生徒の様子や教室の雰囲気がよくわかった。

初日にまず感じたことは、学校内が静かであるということである。授業中の学校が静かなのは当然として、休み時間の学校が静かであった。これは学校が広いこと、壁が厚いことなどといった物理的な理由もあろうが、廊下を移動する生徒の声がもともと小さいのである。これは別に訪問した小学校や中学校でも感じたことで、「しつけ」のよさを感じた。アメリカの高校では生徒は授業のたびに教室を移動する。教師がそれぞれ自分の教室を持っており、授業のたびに生徒がその教室に行くのである。休憩時間は3分くらいしかないから、生徒はとても忙しい。友達と自由にしゃべる時間がないのも学校が静かな理由のひとつかもしれない。また、ひとクラスの生徒数は20人程度でしかないし、いわゆるホームルームクラスではなく、その授業の時だけ一緒になる生徒たちであるから、お互いがさほど親しいわけではない。だから休憩時間だけでなく授業中にも教師の目を盗んで私語をしたりふざけ合ったりする関係ができない。授業中の生徒が思ったより行儀よくきちんとしているように感じたのはこうした事情もあるかもしれない。

先に示した資料Bにもあったように、日本人にはアメリカの学校は自由であるというイメージがある。私もそう思っていた。ところが実際は日本よりはるかに窮屈な高校生活を送っているのが驚きであった。各教室のドアは閉まると自動的にかぎがかかる。授業が始まると教師はたいていドアを閉めるから遅れると自由には入れない。これはただでさえ休み時間が短い生徒にとっては大きなプレッシャーである。また校舎内にはいくつかのテレビカメラが設置されており、副校長のひとり（この学校には4人の副校長がいる）が常に15台ほどのモニターをチェックしている。校長と副校長はみなトランシーバーを持っており常に校内を巡回している。もちろん警察官も校内にいる。各教室にもその教室だけに通じる通信設備があり、必要ならいきなりある生徒を呼び出すこともできる。生徒にとって最も楽しみな昼食時間の食堂はさすがににぎやかでうるさいほどであるが、毎日教員が交代で監視役として食堂の四隅に座って目を光らせている。極めつけは'Chill Out'と呼ばれる部屋の存在で、問題行動のあった生徒はこの部屋に送り込まれる。各教室にこの部屋に通じるブザーがあり、授業中の態度がひどいと教師が係りの教員を呼びこの部屋に連れて行かれるという。呼び名に違いはあれ、どの学校にもこれに類する部屋があるということであった。

しかしこれは必ずしも「生徒が悪いから」とか「生徒を管理する」というネガティブな発想ではない。日本では放課後や休み時間、昼食時間など、生徒だけが教師のいない教室にいる時間がふつうにあると言うと、アメリカの生徒は「うらやましい」と言うが、教員は「そんなときに何かおこったら誰がどう責任をとるのか」という。学校は児童生徒の安全を確認し保証する義務があるため、「教員の目が届かない」という状況を作り出さないことが必要なのである。また授業中には他の生徒の学習の権利を保障し、教師が「教える」ということに集中できるようにするために、生徒の行動を制限する。ちなみに学校では、教科を教える「教師(teacher)」と生徒の学校生活や進路の相談にのる「カウンセラー」がきちんと区別されていて、教師は教えることに専念するシステムを作っている。「学校は生徒を安全に管理し教育を与えるところ」と考えれば納得できない話ではないが、生徒の側からすると気が重いに違いない。

日本に比べ授業中の生徒はよく発言する。その度合いは生徒の意欲や教師の力量やテクニックによって大きく異なる（アメリカの生徒自身がこう言っていた）が、一般的に私語はほとんどなく教師に対する発言は多い。教師が説明している最中に質問の手が何本もあがる。教師は話のきりがつくまで放っておく。指名すると次々に質問をする。また、教師の発問に対しては

指名する間もなく教室内のあちこちから答えが出る。不十分な答えにはすぐに別の生徒が問題点を指摘し訂正する。優秀な教師は自らの発問と生徒からの質問を上手にコントロールしながら授業を展開していく。「すばらしいクラスだから」と参観を進められた「アメリカ史」の授業がまさしくそうであった。もちろん学習意欲に乏しい生徒が多いクラスもあり、そんなクラスでは我が校で私がやるように、座席順に指名するという方法をとっていた。しかし、そんなクラスでも質問の手はよく上がるし、指名を待たずに答えを言ってたしなめられる生徒が複数いる。こういう点は日本と異なる点で、私が自分の授業に取り入れるべくその理由を知りたかったところである。しかし、勉強嫌いが多いと教えられたあるクラスでは、教員が大きな「えんま帳」をこれ見よがしに教卓に広げて、生徒の発言のたびに何かを書き込んでいたし、校内至る所に先に述べたような「監視」の目が光っている。先に「しつけ」ができていると述べたが、これは必ずしも生徒の自発的な「行儀の良さ」ではなく、こうしたことから結果的に「いい子」を演じざるを得ないのだろうとも思われた。

ただ、他人に迷惑をかけさえしなければ（他人の学ぶ権利を侵害しなければ）少々のことは大目に見てもらえるようで、授業中にガムをかんでいたりペットボトルの水を飲んだり、という生徒は珍しくなかった。私が日本の学校との違いについて話す中で、「日本では授業中に飲み食いしてはいけない」と言うと、すかさず教師に「アメリカでもそうだ」と指摘された。他人に迷惑になることではないから見逃しているだけのことであろう。

(3) 研究の結果と考察

① アンケート（資料A）の結果わかったこと

日米両国の生徒に資料Aのアンケートを実施しての素直な印象は、「高校生の意識に大した違いはない」ということである。回答には両国とも高校生らしい悪ふざけや冗談もあったが、その内容や発想はよく似ていて意外なほどであった。日本の高校生は自分たちが教わっている教師の依頼でアンケートに答えるのであるからあまり批判的なことは書きにくいのに対して、アメリカの高校生にとってはその場限りの相手であるから何を書いても構わないという意識があったであろうからその分は割り引かなければならないが、全体としてどちらの生徒もまじめに前向きに答えてくれているように見えたし、実際に生徒の回答を読んでみても、誠意を持って書いてくれていることが伺えた。以下に両国の生徒の回答内容についてコメントしておく。

Q 2　高校生活で一番大切な物は何ですか。

この問いに対して日本でいちばん多い答えは「友達・友情」である。特に女子に多い。ところがアメリカでは「友人」もないわけではないが、「勉強・成績・教養」などの回答が際だって多い。アメリカの生徒にとって学校は「学ぶ場」以上のものではないのかもしれない。学校に対する意識の焦点が「学ぶこと」にあることは上述の学校の様子からも伺える。

Q 3　学校の先生に求めることは何ですか。

日本の生徒は「わかりやすく教えてほしい」「楽しい授業をしてほしい」といった受け身の要求が多いのに対し、アメリカでは「説明・解説」のほか「自分の疑問にきちんと答えてほしい」という主体的な発想が多かった。特にアメリカの女子は約半数がこう答えた。

Q 4　授業中最も心がけていることは何ですか。

これは日米とも「集中して聞くこと」という回答が多かった。日本の男子に「寝ないこと」というのが複数あったが、ジョークだと考えたい。

Q 5　学校の先生が授業中によく指示することは何ですか。

これも両国ともほぼ共通で、「静かにしなさい」「よく考えろ」などが上位であった。

Q 6　母親または父親が勉強や学校に関してよく言うことは何ですか。

これには両国とも様々な回答があった。国による違いというより、家庭による違いであろう。国別の違いを探すとアメリカのほうが「励ましの言葉」や「ほめ言葉」が日本より多いようである。

Q 7　学校のことで悩んだとき相談する相手はだれですか?

両国でもっとも異なる結果が出たのがこの問いである。日本では男女とも圧倒的に「友達」という答えが多い。7割以上の生徒の答えに「友達」が含まれていた。一方アメリカでは「親」が第一

位、続いて「教師かカウンセラー」、「友達」と続く。残念ながら日本の生徒の答えに「先生」はなかった。

Q８　学校行事や学校でしなければならないことで最も好きなことはなんですか。

両者の学校行事が異なるので単純に言えないが、授業がつぶれるのを楽しみにしているのは共通している。

Q９　学校行事や学校でしなければならないことで最も嫌いなことはなんですか。

これも学校行事が異なるので単純に比較できないが、アメリカには学校にいること自体をいやがっている回答がいくつか見られたのが気になった。

Q10　放課後には何をしますか。

Q11　週末には何をしますか。

このふたつの問いに対しては、両国ともバラエティーが豊かであった。映画やスポーツなど共通点も多かったが、アメリカには「パーティー」「ビーチで過ごす」「ドライブに行く」「ボランティア活動」など日本にはない回答が少なからずあった。我が校ではアルバイトが許されていないが、アメリカでは大半の生徒の回答に work が含まれていた。

Q12　家でどのくらい勉強しますか。

日本の生徒は２～３時間が多く、アメリカでは１～２時間が多い。日本の生徒は１年生であることを考えるとよくやっていると考えていいと思うが、文字通り信じていいかどうかはわからない。

Q13　休日に学校に来ますか。

日本ほどではないがこの学校には休日に学校に来る生徒がいるようである。理由はスポーツ活動が中心で、中にＳＡＴ（大学入試資格試験）というものもあった。またこの地方は今年大きなハリケーンに襲われて大きな被害が出たため休校になった日があり、その埋め合わせに何日か休日に学校があったそうである。

Q14　学校は楽しいですか。

日本では「楽しい」と答えた生徒が「とても楽しい」「まあまあ楽しい」を含めて９割に達するのに対し、アメリカでは６割弱で、「時間割による」とか「時と場合による」という条件付きの生徒が多かった。すでに述べたように常に監視されている状況で、生徒たちだけで羽目をはずすことの許されないアメリカの学校では、仲々楽しめないのだろう。回答の中に「ストレス」「プレッシャー」などの語を含んだものが複数見られた。

Q15　10年後に何をしていると思いますか。

予想通りこの問いに対する回答はアメリカの方が具体的で変化に富んでいた。年齢差を割り引いても、アメリカの生徒の方が人生や社会に対する意識が高い。日本の生徒は「不明」や「やりたいことをしている」という曖昧なものが多かった。

②　資料Ｂに対するアメリカの生徒の反応

この資料を提示して意見を求めるときには、「日本の生徒の情報源は主に映画、テレビドラマ、ニュースなどの媒体である。誤解があるかもしれない。」という断りをいれたが、おおかたの生徒は「大部分事実である」と答えてくれた。アメリカの生徒たちの感想は様々であるが、主なものをいくつかとそれについての私の個人的な感想を示しておく。

・アメリカの学校は自由でのびのびしていると思っているようであるが、細かな規則がたくさんあり決して自由ではない。学校の中は規則ずくめで窮屈である。制服がある学校もあるし、制服がない学校でも厳しいdress code（服装規定）があって思いどおりの格好はできない。

――実際アメリカの高校でもらった生徒と保護者を対象とした冊子は、日本でいえば生徒手帳に当たるもののようであるが、Ｂ５判の分厚いもので、規則や注意事項が細かく書かれており、最終ページにはこれを守る旨を述べる生徒と保護者の署名欄があった。

・アメリカでも、親や教師は細かいことにうるさい。

――親や教師が生徒のことを心配し世話をやくのはどこでも同じである。生徒の側からすると「うるさい」と感じることはあろう。これは万国共通であろうが、それをどう受け止めるかは子供次第であるし、どちらがよりうるさいかは比較のしようがない。

・個人ロッカーがあるのは事実である。だがそれが別にさほどいいこととは思わない。

――生徒はみな教室移動に忙しいので、ロッカーを有効に使う使う暇がないようである。また学校が広いしホームルームがないので、いちいちロッカーに

戻るのはめんどうなのであろう、ほとんどの生徒が常にナップサックを背負っていた。全く使っていないという声もあり、もっと大きなロッカーが欲しいとの声もあった。

・学校行事は大がかりであるが、最近は危険なのではないかという心配から参加者が減ってきた。

——学校行事についての具体的な意見は少なかった。その中でこのコメントは世相を反映していると思われた。

・学校がニュースなどで言われるほど危険なわけではない。

——これは多くの生徒に指摘された。しかし日本のことに関する質問で、いくつかのクラスで「校内でのけんかが多いか」と聞かれたので、殺伐とした雰囲気があるのかもしれないとは感じた。中にはこの学校のことではないと断りながらも、「これだけいつも監視されたストレスの多い学校生活をしていると、武器などを持った高校生がいてもおかしくない」という声もあった。「けんか」については教師生徒どちらに聞いても実態はよくわからなかった。

なお、校内にコンピューターが多いことは素直に認める意見が多く、大学にはいるのが簡単かどうかについては意見が分かれた。またこの学校はクラブ活動が盛んで、各種運動部（今女子サッカーがはやりらしい。また女子野球の試合も目にした）のほか、最近できた日本風の漫画を描いて楽しむ「アニメクラブ」もあった。

日本の学校のことについては、「ホームルーム」に興味を示し、またアメリカでも「生徒が教室で待っていて、先生の方が移動するのがよい」と言う生徒が多かった。

授業・勉強については、それぞれの授業で大きく異なり、皆が活発に意見を出し合うクラスもあれば退屈なのもある、というのが代表的なところである。アメリカの学校でも宿題は出るし難しいテストもある、というのも至極当然の指摘であった。

③ 両国の高校生の学校・学習に対する意識の違いについての考察

アメリカ滞在中に他の日本人参加者と何度も話題にしたことであるが、学校のシステムや生徒の様子、校内での教員の役割などに日米では間違いなく大きな違いがある。しかしそれは単に学校制度の違いや教師の技術、意識などによる違いではなく、そこには文化的・社会的な背景がある。それを無視して表面的な違いだけに目を奪われることは戒めなければなるまい。多民族・多文化の国家であるだけに国民間に基本的な共通認識が乏しく、集団を運営していくには「契約書」に似た感覚で基本的なルールを定めなければならない。そしてルールを作った以上はそれを厳密に運用していく。社会的要請や文化的背景があって学校のルールがあるということを強く実感した。

乱暴を承知の上で日米の学校の違いを端的に言えば、アメリカでは学校は「社会の一部」であり、日本では特別な「保護区」である。アメリカでは学校はまさしく将来に備えて教育を受けるという目的を持った「社会的存在」であり、当然社会のルールがそのまま適用される。そこでは自己責任が求められ、自己を認めてもらうには自分でアピールしなければならない。またその目的の障害となるものは排除される。従って自らの意識がこの目的に合致しないものにとっては、そこにいること自体が苦痛になる。アンケートの「学校でもっとも大事なこと」という問いにsurviving（生き延びること・切り抜けること）という回答があったり、「学校でいやなこと」に「一日の長さ」と答えたり、「学校が終わって駐車場に向かうときが一番楽しい」と答える生徒がいることがこれを示している。

一方日本の学校は社会のルールがそのままは当てはまらない「保護された」空間である。少々悪いことをしても教師が盾になってくれ、自己をアピールしなくても教師の方から近寄ってくれる。今回のアンケートには現れていないが、おかしな格好をしたり反社会的なことをする理由に「高校時代にしかできないのだから」という声を聴くことがある。社会的に悪いことをしても親や警察にではなく学校に連絡が行く。学校には一般社会とは違うルールが適用されている。この基本的な認識の違いが表面的な学校の違いに大きく関係していると強く感じた。

アメリカでは全体に「しつけ」がきちんとしていると述べたが、これもやはり「社会」のルールとして、小学校から一貫して指導されており、また家庭でも社会でも当然あるべき姿としてしつけられているからであろう。アメリカでは教育が「K－12」（K＝幼稚園から12年生まで）とか、「1－12」というように一貫して語られることが多い。こうした背景が「学校で、また

社会ではどう振る舞うべきか」という共通認識を形成しているのであろう。生徒たちは喜んでルールに従っているわけではない。社会の要請に従っているのである。表向きの「行儀の良さ」とは裏腹に、アンケートの回答の端々にルールを「守らざるを得ない」彼らの鬱憤が感じられたし、全体的な高校生の表情は日本の我が校の生徒の方が明るいと感じた。

今回の研修の感想として、アメリカのある教員に、「アメリカの生徒はいろいろな罰があって大変だ」という話をしたところ、「何をしたらどうなるとわかっててやったのだからそれは罰ではなくて結果だ」と訂正された。情緒的に物事が進む日本と、契約に似た関係でクールに物事が判断されるアメリカの社会的風土の違いを感じたものである。

私の今回の訪米の大きなテーマは、新課程に向けた「考える力の養成」へのヒントを探ることであった。確かに授業の様子には私が求めていた生徒の前向きな姿があった。しかしそれは授業展開上の教師のテクニックによるものではなかった。単に高校だけで、または学校だけで養成できるものではなく、アメリカの歴史の中で社会的に育成されてきたものであろうと感じられた。まず間違いなく、私たちはアメリカをお手本にするのではなく、私たち自身の力で日本の社会に適した授業方法を確立していかなければならないのだろう。

(4) 今後の展望

今回の訪問で、今回訪問した地域の教員生徒の日本に対する関心が非常に高いことに驚いた。日本式の漫画アニメはわざわざ「アニメ」と呼んでアメリカの物と区別され、生徒の間では大人気であった。町にはポケモングッズがあふれ、生徒の着ているTシャツには漢字がプリントされている。教師たちは自らのモデルとして、日本の教育制度や学校の様子に大きな関心を寄せていた。彼らとの交流は、私自身が日本文化を見直すいいきっかけになったが、一方で彼らが賞賛する日本はすでに過去のものになっているのではないかという気もした。現在の日本の様子を説明するのに、「アメリカと同じように日本でも」という表現があてはまることも少なくなかった。

教育関係者と話していて、教育の現状の問題点を常に認識して、あらゆる情報を手に入れながら新しい教育を創造しようという意欲を至るところで感じた。学校への不満をつづる生徒のアンケートを読みながら、教育を熱く語る教師たちの顔を思い出すと、よりよいものを求めて常に変わり続けようとするアメリカの底力を感じた。私たちも日本の教育を語るに当たり、自らの狭い世界にとどまるのではなく、常に諸外国の情報も手に入れながら広い視野にたって物事を考えなければならない。その際決して表面的な差違にとらわれることなく、その背景にまで思いをいたすべきであるとの思いを強くした。

(5) おわりに

降ってわいたような今回のアメリカ訪問で、事前に状況を十分理解しきれないままの不安な旅立ちだったが、関係者のご尽力のおかげで充実した日々を過ごさせていただいた。なによりもアメリカの学校で実際に教壇に立ち、生徒たちと直接話をすることができたのは得難い体験であった。こうして今回のアメリカ滞在で得たものをまとめてみると、New Bern High Schoolを訪れたのがわずか4日であることが信じられないほど、多くのことを得たことがわかる。すばらしい日々を過ごすことができたことを素直に喜び、心から感謝したい。

現地のテレビのインタビューを受けるという思わぬ体験をしたのもよい思い出であるが、そのとき思わず口をついて出た次の言葉が、今回の研修で得た実感を端的に表しているように思う。

「世界中どこでも生徒は生徒、ティーンエイジャーはティーンエイジャーである。」

価値観が多様化し「脱日本文化化」していく日本の若者に対応していくには、授業のテクニックではなく、アメリカの教師の意欲こそ見習うべきもののような気がした。ますます類似していく両国の生徒を見るにつけ、日米両国の教育関係者が連携していく意味はこれからますます大きくなって行くと思われる。このプロジェクトを通じたアメリカの教員との交流は更に続くし、帰国直後からメールを送ってくれる生徒もいる。文献や資料を通じて情報を得るだけでなく、こうした人的関係を維持発展させていく必要性を認識した研修であった。

2001年12月21日　印刷
2001年12月28日　発行

未来への架け橋　2000
－グローバル・パートナーシップ・スクール－

Bridging to the Future
－Global Partnership Schools－

編集兼　大阪教育大学
発行者　〒582-8582　大阪府柏原市旭ヶ丘4－698－1
電話 (0729) 78－3299, 3300, 3831

印刷所　カツヤマ印刷
〒543-0044　大阪市天王寺区国分町5－1
電話 (06) 6771－1000